

活力ある子を育てる

榎 木 満 生

現在の子ども達に一番必要なもの、それは活力である。日本中の子どもたちが、幼児期の早い段階から学習塾やスポーツ塾や音楽塾に行き、最も大切な他の子どもとの遊びや親とのコミュニケーションがおろそかにされつつある現状では、この子達がつくる次世代文化が心配になる。

仲直り方法を知らない？

今の子ども達に一貫して不足しているのは、人との激しく交わる実体験である。乳児期からテレビ画像を見続けながら育ち、兄弟数が少なく育った子ども達は、ケンカらしいケンカをしたことがない。だから、意見が衝突するのを恐れるし、一度意見が衝突してしまい人間関係を気まぎくしたときに、その修復の方法を知らない。

昔の子ども達は違っていた。近世の文学作品（例えば、夏目漱石の「坊ちゃん」など）の中に度々出

てくるように、昔の子ども達は見知らぬ子どもを見ると、まず相手にケンカを吹きかけて相手の力量を見て、それから仲直りをしたのである。この方法は相手の本当の人格に触れる時間が短縮できるのである。今の子ども達にこのような野蛮な方法を勧めることはできないだろうが、そのバイタリティーは注目値する。

ケンカしたことがないから、一度けんかすると頭に来た怒りを自分で鎮める方法を見い出せない。いつまでもどうでもよいケンカの発端を根にもち、後でどのような仕返しをするかを考え続けている。これはどう見ても不健康である。本当の心身共に健康な子どもは、一度けんかしても、自分自身で気分の転換ができ、人間関係の距離感を自分でコントロールできる必要がある。

どうしたらそのような子どもを育てられるのだろうか。

少子化時代といわれ、兄弟数が減少している現代においては、子ども達の間の出会いが少なくなっている。ケンカも子ども達の数少ない出会いの場であるのとらえケンカも成長のプロセスと考えるとよい。だから、幼児期に起こる泣いたり泣かされたりする経験を簡単に引き離して仲裁しないことである。泣いたり泣かされたりする経験は幼児期では常に起きている。何か欲しいものを他児がもっている力づくで取りにいたり、不器用な動作で子ども同士がぶつかる、などというのはよく起こることである。問題はそのような時に泣くことが悪いことだとせず、しばし成り行きを眺め、子ども達自身が解決方法を見い出せるか観察する余裕が必要である。泣かせた方が泣き出したり、別な子どもが仲裁に入ったり、大人が手出ししなくても結構子どもの間で何とか解決方法を見い出していくものである。このように子ども達が、子ども時代に当事者間で解

決した能力こそ、大人になってから生きてくる。

親達が奪ってしまう活力

親達は、皆可愛いわが子をすくすくと育てていきたいと思うのは当然である。ところがそのように考えている親達が、子ども達に次のような不適切な発言をして子ども達のやる気を奪ってしまうことがある。交流分析派のゲールデンング夫妻はこれを親達の「禁止令」と呼んでいる。次にその代表的なものを挙げて見よう。

(1) 存在してはいけない

子どもの時から悲哀感や絶望感を漂わせていて、実際若者に成長したとき、危険なスポーツに挑戦して見たり、無謀な自動車運転を行うなど、まるで自分の人生を投げ出してしまっている一群の人達がいる。これは、若者が幼児期に親達から、次のようなメッセージをもらい続けて来た結果であるという。

父親「おまえは、この子どもが生まれてから俺のこと構わなくなつたな」

母親「だって当然でしょ。子どもって、それだけ手がかかるんだもの」

このような両親の不和が子どもにも原因があるかのような会話が子どもの前で頻繁になされていると、子どもは無意識に「自分はこの世に存在すること自体が親に迷惑をかけているのではないか」という思いにかられてしまうことになる。この思いは子ども時代だけではなく若者になっても引き継がれ、やがて若死にすることが運命づけられているかのような振るまいをしてしまうというものである。

このように親達からの「存在するな」という潜在



意識下のメッセージは、この他にも例えば、親の育児拒否や虐待や存在無視などによっても引き起こされる。また、場合によっては、親が新聞記事を読み他者の死をよろこんだり、親自身が死を賛美するかのような発言を子どもの前で言ったときにも、子どもの意識の底には、生きることを大切にしないくなる。

(2) 成長してはいけない

親は子どもが一日も早く成長してほしいと思っているはずである。ところがそのような親達から、子どもは「成長してはいけない」というメッセージをもらっている場合がある。例えば、次のような場合である。

子ども「ママ、ハンカチどこ？」

母親「かばんの中に、ハンカチ、ティッシュ、財布など今日必要なものを入れておいたわよ。早く行きなさいよ」

このように子どもに対して至れり尽くせりで過保護になっている母親が、子どもの成長を妨げているのである。子どもは、幼児期から小学校にかけて多くの忘れ物をする。しかしその失敗を親のせいにすることなく、自分でカバンの内容を最終チェックする必要はある。もし忘れ物してもそのまま外出してきたしまった責任は自分にあると認識する必要がある。そのように気がついた時、始めて、その翌日にはカバンの内容を自分で点検するようになる。

つまり、親が子どもの行動を先回りをして過保護に接し続けると、子ども自身が考えて行動すべき機会を奪ってしまうことになる。このようにしていくと、子どもは何を行うにも自信がなく、母親の後を追いかけるようになり「ねえ、ママ、これやっていい？」と絶えず聞かずにはいられない状態をつくり出してしまふのである。つまり、親の過保護が子どもの成長を遅らせる結果になっている。そしてこの

まま、成長していくと、将来指示が与えられない限り行動できない若者になる。そして、やがては多年浪人をしたり、フリーターや瀬回転職者になったり、思春期やせ症患者として、大人社会の中に漕ぎだしていけない若者になるという。

(3) 男性（又は女性）であってはいけない

大人になつてから、男性または女性としての自覚が確立できず、恋愛できなかつたり結婚できなかつたりする人達がいる。このような人達は、子ども時代に親から次のように言われ続けて来た場合である。

母親（女の子に対して）「ああ、おまえが男の子だったらなあ」

ある女の子が大人になるときまでに親から「おまえの性がもし違っていたら」と言われ続けたら、その子は女性として精一杯生きられるかどうか分からなくなるに違いない。これは男の子に対して常にお

しゃれをさせ「もつと優雅でありなさい」と言い続けても同様である。この子達は自分の性に自信がもてず、やがては、性同一性障害や同性愛などに、進んでいく心配がある。

時代によつて男性と女性の在り方は異なつていく。でも誰もがそれぞれの時代の風潮を反映してそれぞれの性を精一杯満喫して生きる権利がある。これからの時代にあつた男性、女性の生き方を考えていきたいものである。

(4) 成功するな

世の中には、せつかく社会のトップになりながら、汚職や失策などをして大切な社会的地位を捨てる人達がいる。このような人達には、あらかじめそのような性格のプログラムが子どもの時期に組み込まれていたとする考え方ができる。例えば次の例がそれである。

母親「あなたはなにをやっても駄目な子ねえ」

このように言われて成長したら、子どもが成長して大人になっても絶えず成功の満足感が味わえずにいるに違いない。同様に「大切なところでいつも失敗するのだから」と言うメッセージをもらい続けても、絶えず社会的成功におびえる性格をつくってしまふであろう。そして成功すると「かならず失敗が待っている」と確信する性格をつくっていくと考えられる。

このようにしてせっかくの成功するチャンスを目の前にしながらオーディション直前で体調を崩す歌手志望者や入学試験の当日になって遅刻してしまふ受験生をつくっていくのである。子どもには新しいチャンスには精一杯挑戦させ、成功を恐れずに勝ち取る性格を身につけさせていきたいものである。

(5) 楽しんではいけない

現在の親世代の中には、仕事をするのが善であり、遊ぶことはよくないことだと思っている人達が

いる。だから子どものうちから、お稽古ごとや学習塾通いなどを頻繁に行い、子ども時代の遊ぶ時間を奪ってしまうのである。

父親「私がこのように忙しい人生をおくっているのは、子どもの頃遊んでいた結果である。だから子どもには勉強や練習させ将来に備えさせるのだ」

しかし、遊ぶことを通して人間関係をつくることも子どもどものときに培いたい能力の一つである。いや、この遊びを通して身につく対人関係能力こそ子ども時代に第一に身につけさせたい能力である。

幼児期、児童期に楽しむ能力を身につけないで育った大人は、やがて周囲の人達から離れて生活し、常に「絶対他人の世話にはならな



「い」といったり、さらに献身的に仕事にのみ専心したりするようになる。また、世の中をすねてことさら難しくして生きようとしたりすることになる。

(6) 仲間に入ってはいけない

子どもの時、他の子どもと一緒に行動してはいけないというメッセージをもらい続ける人達もいる。

母親「ほら、だから○○ちゃんと一緒に遊んではいけないといったでしょ。今度から○○ちゃんを家に連れてくるのをやめなさいよ」

親のエリート意識が時に子ども達の発展の妨げになる。また、親自身が非社交的で周囲から弧高を保っている家もある。また、宗教的に周囲の家とは一線をおいている家もある。しかしながら、親が考えるこのような事情を子どもは分からない。子どもにはそのような偏見がないから誰とでも対等に付き合いたいと思っている。だから、なぜ遊んでよい子と遊んで悪い子がいるのか分からない。子どもには

子どものルールがある。むしろ、親が子どもの付き合う範囲を決めるのではなく、幼児期から幅広く子ども達と付き合うことによって、将来の人間の判断基準がそれだけ明確になると考えた方がよい。

子どもの人生は長い。もし幼児期に制限されたとしてもやがて児童期、青年期になり親の見ていないところで試行錯誤を繰り返しやがて自分なりの価値基準をつくり付き合うようになる。だったら親の目の届く早いうちにさまざまな人格に触れさせ体験を通して友人を選ばせたいものである。

みんなの仲間入りをしてはいけないというメッセージを親からももらい続けると、常に仲間集団に入るのを避けるようになり、常にクラスの例外者の立場をとるようになる。クラスにおけるいじめられっ子の立場や皆が賛成している意見に一人だけ反対の立場をとるようになる。

このように親達が無意識に子ども達に発している

メッセージには、まだまだ数多くのものが含まれる。日頃から注意して子どもとは接していかねければならないことが分かる。

子どもに理由の分かる叱り方を

子ども達の話を聞いていると、何故おこられているのか分からずに叱られている場合が結構多いことに気付く。親が子どもを叱るときには、それなりの理由があるはずである。当然親は叱っている中でその叱っている理由を明確にしていかなければならない。ただ感情に任せて子どもを叱ると、子どもはその後、親の機嫌ばかりをうかがうようになり、何が正しく何が間違っているかが分からなくなる。やがて、子どもの自立を促すためにも世の中の基準を子どもとの判断基準にしていくためにも、叱る理由を説明することは必要である。

終わりに……子育ては一生の仕事である

子どもの活力を考えていくと、結局、親が日頃子どもとどう接するかという基本姿勢が問われていることに気付いてくる。子どもの人格形成時に子育てに手を抜いた後始末は、それから後の長い親子の人生に大きな影響を残してくる。タイムリングよく、愛情を必要としている時期に手をかけて育てることが、子育ての最も基本である。今の時代に多くの男女が結婚し、出産していくが、子どもの成長に合わせたライフサイクルを考え、親子が本当に出合える家庭を築くには、親達はもっと真剣に将来の人生設計を決めて、考えて見る必要があるのではないだろうか。

(お茶の水女子大学)